

五種の修習に関する諸文献

——和訳および註記——

袴 谷 憲 昭

序

本稿で取上げる五種の修習 (bhāvanā) とは、*Mahāyānasamgraha (『撰大乘論』) の第五章で命名されているものをさす。注目すべきことは、この五種の修習を具体的に説明する文が、唯識の他のテキスト中にも全く同文で見出しうるという事実である。この事実が提示する問題点およびこの点に関する筆者なりの見解は、すでに二度にわたって公けにする機会を得た¹⁾。しかし、いずれの場合も、原資料の比較検討が主であったため、それらの資料をいちいち現代語訳によって示す必要はなかったし、また関係文献のすべてを網羅する必要もなかった。本稿は、二度の機会で果せなかった点を補足する意味も兼ねて、関係文献のすべてを指摘し、それらをサンスクリットもしくはチベット訳に基づいて和訳し提示しようとするものである。

五種の修習に関し互いに一致した説明を有するテキストは、三論一經の計四種である²⁾。これら四種には、それぞれ二種の註釈がある³⁾。以下に、これらの関係文献をすべて列挙し、その各々について、本稿で試みる和訳に相当する箇所を指摘しておこう。

-
- 1) 拙論「Asaṅga の聖典観——Abhidharmasamuccaya の dharmaviniścaya 章について——」(曹洞宗研究員研究生紀要, 第4号, pp. 154-169), および 'On a Paragraph in the Dharmaviniścaya Chapter of the Abhidharmasamuccaya' (印仏研, XXI-1) 参照。本稿において上記の拙論を指示する場合は、前者を拙論A, 後者を拙論Bと呼称する。
 - 2) この他に、同文を有するテキストとして Avsabhāva の MSU を挙げるができる。これは MS の本文を引用したものであると思われるので、ここでは特に列挙しないが、本稿註記 26) において後述する。
 - 3) 厳密に言えば、以下に列挙するもののうち、i—0) MS, iii—0) MSA, iv—0) SNS に対して、それぞれ他に一種の註釈を加えることができるが(いずれもチベット訳のみ。P版 によれば、順次に, No. 5553, No. 5532, No. 5481), 最初のもは本文のごく最初の一部に対する註, 残り二つは簡略な註であって、本稿で取上げる文に関連し

- i—0) *Mahāyānasamgraha (略号, MS)⁴⁾, Asaṅga 造
- | | | | | |
|----|--------|--------------|-------|------------------------------------|
| 漢訳 | 仏陀扇多訳 | 『摂大乘論』 | 大正31巻 | 107a ²⁶ -b ⁴ |
| | 真諦訳 | 『摂大乘論』 | 同上 | 126b ¹¹⁻¹⁷ |
| | 達摩笈多等訳 | 『摂大乘論积論』中の本論 | 同上 | 303b ²¹⁻²⁸ |
| | 玄奘訳 | 『摂大乘論本』 | 同上 | 146a ⁴⁻¹² |
- チベット訳 *Theg pa chen po bsdus pa*
 P 版, No. 5549, Vol. Li, 35b³⁻⁸: D 版, No. 4048, Vol. Ri, 30b⁵⁻³
 1a¹
 É. Lamotte, La Somme du Grand Véhicule d'Asaṅga, Tome I, pp.
 66-67, V, § 4
- i—1) *Mahāyānasamgrahabhāṣya (略号, MSBh), Vasubandhu 註
- | | | | | |
|----|--------|----------|-------|---------------------------------------|
| 漢訳 | 真諦訳 | 『摂大乘論积』 | 大正31巻 | 224c ¹² -228b ⁴ |
| | 達摩笈多等訳 | 『摂大乘論积論』 | 同上 | 303b ²⁹ -c ¹⁹ |
| | 玄奘訳 | 『摂大乘論积』 | 同上 | 359b ⁶⁻²⁵ |
- チベット訳 *Theg pa chen po bsdus paḥi ḥgrel pa*
 P 版, No. 5551, Vol. Li, 205b⁷-206a⁷: D 版, No. 4050, Vol. Ri, 1
 696⁷-170a⁵
- i—2) *Mahāyānasamgrahopanibandhana (略号, MSU), Asvabhāva 註
- | | | | | |
|----|-----|---------|-------|--|
| 漢訳 | 玄奘訳 | 『摂大乘論积』 | 大正31巻 | 424c ²⁸ -425a ²⁹ |
|----|-----|---------|-------|--|
- チベット訳 *Theg pa chen po bsdus paḥi bśad sbyar*
 P 版, No. 5552, Vol. Li, 314b¹-315a⁷: D 版, No. 4051, Vol. Ri,
 259a²-b⁶
- ii—0) Abhidharmasamuccaya (略号, AS), Asaṅga 造
- V. V. Gokhale, Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, p. 35, ll.
 25-28
- P. Pradhan, Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, p. 85, ll. 3-10
- | | | | | |
|----|-----|------------|-------|-----------------------|
| 漢訳 | 玄奘訳 | 『大乘阿毘達磨集論』 | 大正31巻 | 688a ¹⁶⁻²¹ |
|----|-----|------------|-------|-----------------------|
- チベット訳 *Chos mñon pa kun las btus pa*
 P 版, No. 5550, Vol. Li, 125a¹⁻⁴: D 版, No. 4049, Vol. Ri, 62a⁷-b²
- ii—1) Abhidharmasamuccayabhāṣya (略号, ASBh), 註釈者未定⁵⁾
-
- た言及はないから省略する。
- 4) 以下, カッコ内に示す略号は, サンスクリット原典の存しない場合には, チベット訳に対して適応される。
- 5) 篠田正成「Abhidharmasamuccayabhāṣya の成立年代」(印仏研, XVIII-2, p. 437-441) 参照。

- サンスクリット校訂本未出版⁶⁾
 漢訳 玄奘訳 『大乘阿毘達磨雜集論』⁷⁾ 大正31巻 752c⁷⁻²³
 チベット訳 *Chos mñon pa kun las btus pañi bsad pa*
 P 版, No. 5554, Vol. Śi, 105a⁶-b⁵: D 版, No. 4053, Vol. Li, 85a⁴-b²
- ii-2) *Abhidharmasamuccayavyākhyānāma (略号, ASV)
 チベット訳 *Mñon pa chos kun nas btus pañi rnam par bsad pa šes bya ba*
 P 版, No. 5555, Vol. Śi, 308b³-309a⁴: D 版, No. 4054, Vol. Li, 251b⁶-252a⁵
- iii-0) Mahāyānasūtrāṃkāra (略号, MSA), 註釈者不明⁸⁾
 S. Lévi, *Asaṅga: Mahāyāna-sūtrāṃkāra*, Tomme I, p. 181, ll. 12-21
 漢訳 波羅頗蜜多羅訳 『大乘莊嚴經論』 大正31巻 658c¹⁹-659a⁴
 チベット訳 *Mdo sdeñi rgyan gyi bsad pa*
 P 版, No. 5527, Vol. Phi, 281a⁷-b⁵
- iii-1) *Mahāyānasūtrāṃkāraṭīkā (略号, MSAṬ), Asvabhāva 註
 チベット訳 *Theg pa chen poñi mdo sdeñi rgyan gyi rgya cher bsad pa*
 P 版, No. 5530, Bi, 188b³⁻⁷: D 版, No. 4029, Bi, 168a⁶-b²
- iii-2) *Sūtrāṃkāravṛttibhāṣya (略号, SAVBh), Sthiramati 註
 チベット訳 *Mdo sde rgyan gyi ḥgrel bsad*
 P 版, No. 5531, Tsi, 307a⁵-308a⁵: D 版, No. 4043, Tsi, 265a⁷-266a⁶
- iv-0) *Saṃdhinirmocanasūtra⁹⁾ (略号, SNS)
 チベット訳 *Hphags pa dgoñs pa ñes par ḥgrel pa šes bya ba theg pa chen poñi mdo*
 É. Lamotte, ed. p. 95, l. 24-p. 96, l. 4
- iv-1) *Āryasaṃdhinirmocanasūtre āryamaitreya-kevalaparivartabhāṣya (略号,

6) サンスクリット写本については、拙論 A (p. 168), および篠田前掲論文参照。

7) ただし、この漢訳は形式的にも内容的にも次の ii-2) ASV に対応すると考えた方がよいかもしれない。ASV の和訳参照。

8) 学者によって諸説がある。それらの諸説および筆者個人の推定の方角については、拙論 'Asvabhāva' s Commentary on the *Mahāyānasūtrāṃkāra* IX. 56-76' (印仏研, XX-1, p. 469, 脚註 12), および拙論 A (p. 159), 拙論 B (P. 457) 参照。

9) 年代的に言えば、この経を最初に列挙し、和訳もそれに順ずるべきであるが、筆者は本稿において、この経の校訂者・仏訳者である É. Lamotte 教授のサンスクリット還元批判的訂正を試みたいと考える。この試みを容易にするため、ここでは便宜的に最後にこの経を扱う。

SNSBh)

チベット訳 *Hphags pa dgoṅs pa nes par ḥgrel paḥi mdo las hphags pa byams paḥi leḥu ṅi tsheḥi bśad pa*

P 版, No. 5535, Vol. Tshi, 180b⁸-181b⁴

iv-2) *Āryasamdhinirmocanasya vyākhyā nāma (略号, SNSV)

チベット訳 *Hphags pa dgoṅs pa nes par ḥgrel paḥi mdohi rnam par bśad pa*

P 版, No. 5845, Vol. Co, 205a²-206a³

次に和訳上の筆者の心積りを記しておく。先に断わったように、和訳はサンスクリットもしくはチベット訳に基づいて行う。現存サンスクリットの利用できるものは当然それを第一次資料とする。漢訳は注意すべき差異が認められる以外は一切指摘しない。その相当箇所は上に詳細に記したわけだから各自比較検討の労をとられたい。訳文はできるだけくたこうと努めたが、そのため漢訳で馴みの術語はかえって理解しづらいものになったかもしれない。しかし、そのような場合にもサンスクリット原語を補って訳語の不備を助けたつもりである。チベット訳のみに基づいた和訳の場合は、その推定原語の確かでないもののみチベット語を並記し、確かと思われるものについては並記を避けた。

I

i-0) MS¹⁰⁾

これらの段階 (bhūmi) における修習 (bhāvanā) はどのように考察されるか。この場合、菩薩はそれぞれの段階において、止 (śamatha) と観 (vipaśyanā) とを修習するのに、五種の方法 (kāraṇa) によって修習する。五種の方法とはなにか。すなわち、(1') 総合的な修習 (saṃbhinna-bhāvanā) と (2') 無相の修習 (animitta-bhāvanā) と (3') はからいのない修習 (anābhoga-bhāvanā) と (4') 激しい修習 (uttapta-bhāvanā) と (5') 飽くことのない修習 (*chog par mi ḥdsin par bsgom pa, asaṃtuṣṭa-bhāvanā*)¹¹⁾ とによる [方法] である。

これら五種の方法である修習によって、菩薩たちの五種の結果が現われる。と

10) チベット訳原文は拙論 A (pp. 163-164) に掲載したから参照のこと。

11) 五種の修習に関する五種の名称は、この MS の他に、AS, ASBh, ASV, および玄奘訳『阿毘達磨雜集論』に列挙されている。(1')~(4') までは、AS と全く一致するので、カッコ内のサンスクリットはそれによって補った。しかし、(5') は AS のものと一致しない。ただし、MS の仏陀扇多訳のみは、「転転修」とあり、AS の (5') に近い。なお、拙論 A (註 20), 拙論 B (p. 463) を参照のこと。

いうのも、[菩薩は] (1)¹² 一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源 (dauṣṭhulya-āśraya) を溶かし出し (drāvayati), (2) 様々な概念の除去 (nānātva-saṃjñā-vigati) と法の園における喜び (dharma-ārāma-rati) とを得¹³⁾, (3) 分割できぬ姿をしいかなるところでも量りきれぬ法の輝きをよく知り¹⁴⁾, (4) 清浄な方面に属する (viśuddha-bhāgīya) 無分別の相 (nimitta) を体現し¹⁵⁾, (5) 法身 (dharma-kāya) を充満し (paripūri) 完成する (pariniṣpatti) ために、より一層最上な因を体得するからである。

i—1) MSBh

これらの地のそれぞれにおいてどのように修習を行うかということを示すようであれば五種である。また彼（菩薩）が止と観とを修習する場合には、その両者も五種によって修習される。

(1) 「一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出す」ということについて。この場合、「粗悪 (dauṣṭhulya)」というのは、道徳的および認識的障害 (kleśa-jñeya-āvaraṇa) となる無始の時から種子の潜在的な余力 (vāsanā) のことである。そ

12) 下線部分は、i—0) MS, ii—0) AS, iii—0) MSA, iv—0) SNS 中に示す下線部分と完全に一致する文を指示する。下線部分のカッコ内のサンスクリットは、AS, MSA によって補ったもの。

13) AS, MSA におけるサンスクリット原文は 'nānātva-saṃjñā-vigatiṃ (or 'viga-tāṃ' in the AS) ca dharma-ārāma-ratiṃ pratilabhate' である。この MS のチベット訳は 'sna tshogs kyi ḥdu śes dan bral te / chos kyi kun dgaḥ la dgaḥ ba thob pa' とあり、「様々な概念を除去して、法の園における……」と読むべきであるが、筆者は二種のことを得る意味に考えて訳出した。MSA のチベット訳は、'... ḥdu śes dan bral baḥi chos kyi dgaḥ ba ...' とあり、「……除去した法の園……」と読む。サンスクリット文は bahuvrīhi としても読めるが 'ca' が生きないように思う。

14) MSA のサンスクリット文 'aparicchinnā-ākāraṃ ca sarvato' pramāṇaṃ dharmā-avabhāsaṃ saṃjñānīte' によって訳出した。チベット訳原文は、'chos kyi snañ ba thams cad du tshad med cin rnam pa yoñs su ma chad pa yañ dag par śes pa'。おそらく原文は同一だったと思われるが、チベット訳は始めに列挙したそれぞれの本で訳し方が異なる。サンスクリット原文によれば、'aparicchinnā-ākāra' および 'apramāṇa' は bahuvrīhi として 'dharma-avabhāsa' にかかるが、'sarvato' を 'aparicchinnā-ākāra' にかけるか、'apramāṇa' にかけるか、あるいは両者にかけるかによって訳出が異なるのであろう。チベット訳は一般に訳者が無視され没个性的に取扱われがちであるが、今後訳風も充分考慮されるべきかと思う。

15) チベット訳原文は '... mtshan ma rnam par brtags pa ma yin pa rnams de la kum tu ḥbyun ba', AS, MS のサンスクリット原文は、'... asya nimittāni samudācaranti'。いずれも「……無分別の相が彼（菩薩）に現われる」と訳すべきであるが、菩薩を主語としたために那語としてはかく訳出した。

の障害の集りを、総合的な法を対象とする (*ḥdres paḥi chos la dmigs pa, saṃbhinna-dharma-ā lambana*)¹⁶⁾ 止と観の智慧 (*jñāna*) によって一瞬ごとに微力にする (*stobs chuñ bar byed pa*), あるいは〔その〕集りを追い払う場合に、これを「溶かし出す (*drāvayati*)」〔というのだ〕と認められる。また、微力にすることが「溶かし出す」ことである。

(2) 「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」というのは¹⁷⁾, ……

(3) [「分割できぬ姿をしいかなるところでも量りきれぬ法の輝きをよく知る」というのは,] 十方にわたって分割できぬ姿をした法の輝きを知ることである。あたかも善く暗誦された経文 (*gṣuñ, grantha*) のように。

(4) 「清浄な方面に属する無分別の相を体現する」ということについて。義務の完成をそなえること (*dgos pa yoñs su grub pa dañ rab tu ldan pa, kārya-pariṇiṣpattisamprayukta*)¹⁸⁾ が、この「清浄な方面に属する無分別の相を体現する」ことであって、ここで仏たるものは〔その〕隠された意図 (*dgoñs pa, saṃdhi*) を満すのだと認められる¹⁹⁾。

(5) 「法身を充満し完成するために、より一層最上な因を体得する」ということについて。そのうち「充満」とは第十の段階 (*daśamī-bhūmi*) に属することであり、「完成」とは第十一番目の仏の段階 (*buddha-bhūmi*) において法身を完成することである。「より一層最上な因を体得する」というのは、このように、その因よりなおも仏の段階にいたるまで行じゆくことである²⁰⁾。

16) 本稿註記 51) 参照。

17) 以下、達摩笈多訳「於種種相成立修多羅等謂法中，離種種想，於法樂中得樂，非謂余樂，此中樂者謂內樂故。復有別釈，奢摩他毘鉢舍那，於法中若受若覺若觀，非顯著龜淺領納順行，然唯以憶念光明，細領納細順行。」，玄奘訳「契經等法住種種性，遠離如是種種性想，即是証得法苑之樂，於中可居故名為苑。復有余義。於隨所受尋伺法中，不起龜頭領納觀察，但由止觀憶念光明，而起微細領納觀察。」に相当するチベット訳は P 版, D 版ともに欠く。おそらく欠漏か。

18) 本稿註記 60) 参照。

19) チベット訳原文は、'*ḥdir sañs rgyas ñid ni dgoñs pa yoñs su rdsogs paḥo ṣes ḥdod do* //」。達摩笈多訳「仏果即是所成成就」。玄奘訳「此中意取所得仏果名事成辦」。下線のチベット訳は '*dgos pa (kārya)*' と訂正されるべきか。

20) 以上と対応する真諦訳には言及しなかったが、これはかなりの分量にわたる註釈を構成している。特に本文 (5) に対する説明は、大正藏経で 8 段余の長きにわたる。この特異性に関しては、宇井伯寿『攝大乘論研究』(pp. 626-638) 参照。なお五種の修習の名称に関する説明も真諦訳のみに認められるものである。

i—2) MSU

「それぞれの地において (bhūmau bhūmau)」というのは、いちいちの地において (ekaikabhūmau) と言うこと。「止」とは集中 (samādhi) であって散乱 (vikṣepa) の反対。「観」とは倒錯 (viparyāsa) の反対で智慧 (prajñā) のこと。その両者の修習を各々の〔地〕において励み、五種の方法によって繰り返し実行する (*goms par byed pa, abhyāsam karoti*) のである。

「総合的な修習」などということについて。

(1') 「総合的」とは「句括的 (*bsdus pa*)」ということ。実に一つの段階 (bhūmi) のなかにすべてを包含して (*mñon par bsdus te*) 繰り返し実行するからである。

(2') また、修習するとき、対象としての骸骨 (*ken rus, saṅkalika*) などに対しすべてを総合するという考えを除去するために、「無相の修習」と言うのである。なぜなら、〔この修習は〕すべての相 (nimitta) を離れた無区別の法界 (dharma-dhātu) を修習するからである。

(3') 無相の修習でも、はからい (*rtsol ba, ābhoga*) をともなったり、骨を折って努めたりするだろう (*ḥbad pas ḥjug par ḥgyur*) という考えを除去するために、「はからいのない修習」と言うのである。無理をして努める必要もなく (*bsgrim ma dgos par*) 自然に (*ran gi ñan gis, svarasena*) 活動するからである。

(4') はからいのない修習も、勝れたもの (*mchog*) 勝れていないもの (*mchog ma yin pa*) とによって二種になるだろうという考えを除去するために、「激しい修習」と言うのである。「激しい」とは「勝れた (*mchog*)」と同一の意味である。

(5') 時には激しい修習を獲得してすべてをなしおえてしまうと、今さら他になにをなす必要があるかと思ってしまうだろうという考えを除去するために、「飽くことのない修習」と言うのである。無相にして激しい修習と無関係ではないが²¹⁾、とりわけ勝れたものを獲得しようと修習に努めるべきである。

(1) 「あらゆる粗悪の根源を溶かし出す」ということについて。「粗悪の根源」とはアーラヤ識 (*ālaya-vijñāna*) のこと。それを「溶かし出す」とは集りとなさない (*tshogs su mi byed pa*) こと。〔粗悪な〕集りを断つから、あたかも、霊妙な薬 (*sman bcud kyi len, bhaiṣajya-rasāyana-*) によって病巣 (*nad kyi tshogs*) を駆除する (*bzlog pa*) ようなものである。

(2) 「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」というのは、我 (*ātman*) や法 (*dharma*) や仏 (*buddha*) などの概念の相 (*saṃjñā-nimitta*) を離れるか

21) P 版 は '*mi sbyar bar mi byaḥo*' であるが、D 版 '*mi sbyar bar mi byaḥi*' を採る。

らである。この境地に遊ぶ (*kun nas dgaḥ ba, āramati*) から、園 (*kun dgaḥ, ārāma*) である。法 (dharma) がすなわち園 (ārāma) であるから、「法の園 (dharma-ārāma)」である²²⁾。法とはここでは法界 (dharma-dhātu) のこと。そこにおける「喜び (rati)」とは満足 (*tshim pa*) である。たとえば、ある観照者もしくは有能なものが戸外の園 (*kun dgaḥ ra ba, ārāma*) や林 (*skyed mos tshal, upavana*) や森 (*nags, vana*) で喜びを感じるように²³⁾。

(3) 「いかなるところでも量りきれぬ」というのは、十方においてこれだけであると分割できず、量りきれない姿をしているから、「分割できぬ姿をした法の輝きをよく知る」のである。あたかも習熟した経文を観じるように。

(4) 「清浄な方面に属する無分別の相を体現する」ということについて。「清浄な方面に属する」とは、これから仏になる方面に益 (*phan pa*) のあることで、たとえまだ清浄になりきっていないとしても、仏や転輪 [王] (*ḥkhor los sgyur ba, cakravartin*) や白い傘 (*gdugs dkar po, śukla-chattra*) などには無分別の相が現われるのである²⁴⁾。

(5) 「法身を充満する」のは第十の段階においてであり、その同じ [法身] を「完成する」のは第十一の段階としての仏の段階においてである。「より一層最上な」とは最上から最上へということ。仏の段階 (buddha-bhūmi) にいたる因は美しいもの (*mḍses pa ṅid, śobhatā*) である。因をよく畜積するからである。このように、五種の方法である修習の結果は、これら五種の方法の順序どおりに表わされる²⁵⁾²⁶⁾。

22) 'dharma-ārāma' を karmadhāraya によって解す。「園のごとき法」。

23) チベット訳原文は、*'dper na yul can nam thub pa ḥgaḥ ṣig phyi rol gyi kun dgaḥ ra ba ḥam | skyed mos tshal lam | nags su dgaḥ ba bṣin no //* (下線は D 版) とある。玄奘訳は「如王宮外上妙苑園，遊戯其中受勝喜樂，法界亦爾」。この箇所を筆者は自信をもって訳出できない。

24) チベット訳に従って、仏・転輪王・白い傘などの三者を並列的に訳したが、もしサンスクリット原文が 'buddhasya cakravartinaś ca śukla-chattra-āder avikalpitāni nimittāni samudācaranti' などとあったとすれば、「仏や転輪王の白い傘などに無分別の相が現われる」と訳した方がよいかもしい。

25) 内容的にここで切れるが、チベット訳文としては次の文へ接続する。

26) なお、この MSU 中には、MS 第十章 (Lamotte, ed., p. 85, X, § 4) の本文に対する註釈において、*'rnam pa lña legs par bsgoms pa ṣes bya ba la | rnam pa lña ni'* とし以下 i-0) MS の下線部分相当チベットと一字一句違わない文を示す (P版, 335b²⁻⁵, D版, 277a⁶-277b¹)。玄奘訳 (大正31巻, 437c) も同じ。ともに引用を明示しないが、本文・註釈の関係からみて、MS 本文中のものを引いたのであろう。ただし、この箇所に対応する MSBh 真諦訳には、「此明得因五修及五修所得五

II

ii—0) AS²⁷⁾

ヴァイブリヤ (vaipulya)²⁸⁾ において、法に関するサマーディ (samādhi) に巧みな (kuśala) 菩薩をどのように理解しなければならないか。五種の方法によって [菩薩は] (1) 一瞬ごとに (pratikṣaṇam) あらゆる粗悪の根源 (sarva-daṣṭhulya-āśraya) を溶かし出し (drāvayati), (2) 様々な概念の除去 (nānātva-saṃjñā-vigata) と法の園における喜び (dharma-ārama-rati) とを得 (pratilabhate), (3) 分割できぬ姿をし (aparicchinna-ākāram), いかなるところでも量りきれぬ (sarvato²⁹⁾ pramāṇam) 法の輝き (dharma-avabhāsa) をよく知り (saṃjānāti), (4) 清浄な方面に属する (viśuddha-bhāgiya) 無分別の相を (avikalpitāni nimittāni) 体現し (asya samudācaranti), (5) 法身 (dharma-kāya) を充滿し (paripūri) 完成する (pariniṣpatti) ために、より一層最上な (uttarād uttarataram)³⁰⁾ 因を体得する (hetu-saṃparigrahaṃ³¹⁾ karoti)。

³²⁾ 以上で (tatra)³³⁾, 五種の修習において五種の結果が完成される, ということを示す。五種の修習とは, 順次に (1') 総合的な修習と (2') 無相の修習と (3') はからいのない修習と (4') 激しい修習と (5') [根源の] 転換を相とする修習 (parivṛtti-nimitta-bhāvanā)³⁴⁾ とである。

ii—1) ASBh

果, 如因果修差別中説」(大正31卷, 252c) とあって本文第五章の問題の文を指示している。

27) このサンスクリット原文およびチベット, 漢訳は拙論 A (pp. 164-165) に示したから参照のこと。

28) 拙論 A (pp. 154-158) 参照。

29) 'sarvatas' チベット・漢訳により補う。MSA のサンスクリットもこれを支持する。

30) 玄奘訳「転上転勝」の下線にあたる語はない。ただし, これに対応するものは SNS 中に認められる。本稿註記 67) 参照。

31) Gokhale, ed., 'saparigraha' をかく訂正する。MSA のサンスクリットがこれを支持し, また, iv—0) に示す SNS のチベット訳 'yañ dag par yons su ḥdsin pa' もこれを支持する。

32) 以下の文はサンスクリット断片にしかない。拙論 A (p. 162) 参照。

33) 'tatra' の解釈については, 拙論 A (註 19), 拙論 B (p. 463) 参照。

34) この名称のみ MS のものと異なる。Gokhale, Pradhan とともに 'parivṛttinibhābhāvanā' としているが, かく訂正して読む。拙論 B (p. 463) 参照。

「ヴェイプリヤにおいて、法に関するサマーディに巧みな菩薩」と説くのは、止の讃嘆 (*phan yod*, *anuśaṃsa*) と、観の讃嘆と、その両者の讃嘆とを主題としていると知るべきである。そのうち、止の讃嘆は二種である。

(1) 一瞬一瞬、勝れた状態へ進展する (*khyad par du ḡgro ba*, *viśeṣa-gamana*) 平静さ (*śin tu sbyaṅs pa*, *praśrabdhi*) によって、たえず身を満すから、「一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出す。」

(2) すべての、教説としての法 (*bstan paḥi chos*, *deśanā-dharma*) を区別なく (*khyad par med pas*, *nirviśiṣṭena*) 唯一の味 (*ro cig pa*, *eka-rasa*) として信解し (*mos pa*, *adhi-MUC-*) 内観して (*mñam par ḡjog pa*, *samā-DHĀ-*), [五つの] 範疇 (*skandha*) などの意味に関する種々の (*rnam pa tha dad pa*, *nānā-ākāra*) 概念 (*saṃjñā*) を離れることによって、経など (*sūtra-ādi*) の「法の園における喜びを得る。」観の讃嘆も二種である。

(3) 究明された (*rab tu rnam par phye ba*, *pravi-CI-*) ままに、法をたえず忘れず、それぞれの気憶に専心することによって、経などの法に関する智慧 (*prajñā*) の輝きの姿が分割されず量りきれぬものとなる。

(4) 根源を転換する (*gnas ḡgyur ba*, *āśraya-parivṛtti*) 前の特徴 (*śña rtags*, *pūrvalinga*) に属し、無分別 (*rnam par mi rtog pa*, *nirvikalpa*) で無為なる (*mñon par ḡdus ma byas pa*, *anabhisamskṛta*) 相が現われる。

その両者 (止と観) の讃嘆とは [残りの一種。]

(5) 法身は認識的障害 (*jñeya-āvaraṇa*) を断つ根源の転換 (*āśraya-parivṛtti*) に包括されるから、第十の段階で [それを] 「充満し」、如来 (*tathāgata*) の段階で [それを] 「完成するために、より一層最上な因を」 [法界から] 注がれる (*rgyu mthun pa*, *niṣyanda*) 潜在的な余力 (*vāsanā*) を引き出すという仕方によって「体得する。」

ii—2) ASV

それら五種の讃嘆に関し、讃嘆とは、止の讃嘆と、観の讃嘆と、その両者の讃嘆とを主題としていると知るべきである。

そのうち、止の讃嘆は二種である。…… (以下、(1) から (5) にいたる文は上に示した、ii—1) の文と全く同じものであるから重複を避け省略する) ……

³⁵⁾ 以上のそれぞれによって、五種を修習する場合に五種の結果が完成される、

35) これ以下の文とほぼ同文が、ASBh の写本、玄奘訳『大乘阿毘達磨雜集論』の中に認められる。三者を対照すると次のとおり。*de dan de dag gaṅ gis rnam pa [lña]r bsgoms pa na | ḡbras bu rnam pa lña ḡgrub par ḡgyur ṣes yaṅ dag par*

ということが示される。五種の修習とはなにか。(1') 平静を相とする修習 (*śin tu sbyaṅs paḥi mtshan ma bsgom pa*, praśrabdhi-nimitta-bhāvanā) と (2') 無異の修習 (*tha mi dad pa bsgom pa*) と (3') 無相の修習 (*mtshan ma med pa bsgom pa*, animitta-bhāvanā) と (4') 無行の修習 (*spyod pa med pa bsgom pa*) と (5') 涅槃の修習 (*yoṅs su mya ṅan las ḥdas pa bsgom pa*, parinirvāṇa) とである。

III

iii—0) MSA

その同じことについて (*tatra eva*)³⁶⁾、讚嘆 (*anūsamsa*) の弁別に関する頌がある。

智あるもの (*dhīmat*) たちの讚嘆は、あらゆる点で (*sarvathā*)、すべての段階において (*sarva-bhūmiṣu*)、止および観に関して、二と五とよりなるもの (*dvaya-pañca-ātmaka*) であると認められる。

XX-XXI, 31

まさにそこで (*tatra eva*)、菩薩たちがパーラミター (*pāramitā*) を得るとき、あらゆる種類 (*sarva-prakāra*)³⁷⁾ の讚嘆はすべての段階において五種であると知るべきである。

[菩薩は] (1) 一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出し, (2) 様々な概念

bstan to || bsgom pa lña gaṅ ṣe na | śin tu sbyaṅs paḥi mtshan ma bsgom pa daṅ | tha mi dad pa bsgom pa daṅ | mtshan ma med pa bsgom pa daṅ | spyod pa med pa bsgom pa daṅ | yoṅs su mya ṅan las ḥdas pa bsgom paḥo || : 'tad etat pañcavidhāyā bhāvanāyāḥ phalaṃ pañcavidhaṃ nirvarttata iti sandarśitam / pañcavidhā bhāvanā katamā / praśrabdhi-nimitta-bhāvanā saṃbhinna-bhāvanā animitta-bhāvanā anābhoga-bhāvanā parinirvṛtti-nimitta-bhāvanā ca' (Pradhan, ed., p. 85, note, 5) : 「彼因如是五種，即顯五修能得果。何等為五。謂，息相修，和合修，無相修，無功用修，轉相修。」(大正31卷，625c) (1') と (3') は三者が完全に対応する。(2') は原語が 'saṃbhinna' とすれば 'tha mi dad pa' とチベット訳されてもおかしくはないし，(4') も原語 'anābhoga' に対して 'spyod pa med pa' の可能性もありうるであろう。漢訳は (2') も (4') もサンスクリットによく対応する。

(5') はサンスクリット・漢訳の対応関係が同様に一致しているが，ひとりチベット訳のみが異なる。しかし，写本が誤って，'parinirvṛtti-nimitta' とあるべきを 'parinirvāṇa' としたために，かかるチベット訳が生じたものとするれば，三者は同じ系統にあったことになる。しかし，MS, AS の呼称の例からみて，伝承の間にかかなりの混乱があったのかもしれない。

36) 前の頌の規定を受けて 'bhūmi' を指す。

37) 頌の 'sarvathā' の言い換え。

の除去(nānātva-samjñā-vigati)³⁸⁾と法の園における喜び³⁹⁾とを得、(3) 分割できぬ姿をしいかなるところでも量りきれぬ法の輝きをよく知り (samjñānīte)⁴⁰⁾, (4) 清浄な方面に属する (viśuddhi-⁴¹⁾bhāgiya) 無分別の相を体現し⁴²⁾, (5) 法身を充満し完成するために、より一層最上な因を体得する。

以上のうち、最初と第二とは止の方面 (śamatha-pakṣa) に属すと知るべきである。第三と第四とは観の方面 (vipaśyanā-pakṣa) に属し、残りは両者の方面に属す〔と知るべきである〕。

iii—1) MSAṬ⁴³⁾

(2) 「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」というのは、物質的 (rūpin) もしくは非物質的 (arūpin) 法の相 (nimitta) であれ、あるいは有為 (saṃskṛta) や無為 (asaṃskṛta) の法の相であれ、そのような (evamādi) あらゆる相を心にかけて (amanasikāra) に滅して、無相の姿として法の喜びを得ることで、[換言すれば] 止を得ることによって不動となるという意味である。

(4) 「いかなるところでも分割できぬ姿をし量りきれぬ法の輝きをよく知る」というのは、物質的もしくは非物質的法に関して、分割されない⁴⁴⁾ 姿をした法の輝きをよく知るということである。また、「いかなるところでも分割できぬ⁴⁴⁾ 姿をし」というのは、十方にわたって (*phyogs bcur*⁴⁵⁾, *daśadiśas*) 分割できぬ姿をした法の輝きをよく知るということである。あたかも、よく熟知した (*legs par sugs pa*, *supratipanna*) 経文 (*gṣuñ*, *grantha*) が明瞭であるように。

38) AS では 'vigata'。なお、これ以下に指摘する以外は AS 和訳中の下線カッコ内のサンスクリットと同じ。

39) S. Lévi, ed., 'dharma-ārāma-ratiḥ' とあるを 'ratim' と AS にならって訂正する。

40) AS では 'samjñānīte'。parasmaipada と ātmanepada の相違のみ。

41) AS では 'viśuddha'。

42) この一句、AS とでは語順が異なる。MSA が 'avikalpitāni ca asya viśuddhi-bhāgiyāni nimittāni samudācaranti' であるに対し、AS は 'viśuddha-bhāgiyāni ca asya avikalpitāni nimittāni samudācaranti'。

43) この註釈中 (1), (3), (5) の説明がないのは欠漏のためではない。Asvabhāva の MSA に対する註釈は、一般に、簡潔で本文すべてにわたるものでないことは他の箇所からも推測できる。

44) P版, 'yōns su ḥchad pa'。D版により 'yōns su ma ḥchad pa' と訂正。

45) P版, 'phyogs bcur'。D版によりかく訂正す。'sarvatas' を解釈したこの語が SNS では本文となっている。本稿註記 56) 参照。

iii—2) SAVBh

「その同じことについて、讚嘆⁴⁶⁾の弁別に関する頌がある」ということで、今や、十の段階 (daśa-bhūmi-) において十のパラミター (daśa-pāramitā-) を完成する、あらゆる (ji sñed yod pa) 徳 (yon tan, guṇa) と善 (legs pa) との弁別に関する一頌を示す。

「智あるものたちの讚嘆は、あらゆる点で、すべての段階において、止および観に関して、二と〔五〕とよりなるものであると認められる」ということについて。「智あるもの」、すなわち菩薩が、信解をおこす実践 (mos par spyod pa, adhimukti-caryā) より第十の段階にいたるまでに、十のパラミターを完成するには、五種の讚嘆があると知るべきである。五種の讚嘆とは、註釈 (ḥgrel pa)⁴⁷⁾ 中に前出したものである。その五種をまた三種とも設定する。一つは止の方面 (śamatha-pakṣa) としての設定、一つは観の方面 (vipaśyanā-pakṣa) としての設定、〔残りの〕一つはその両者の方面としての設定である。

(1) 「一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出す」ということについて。「粗悪の根源」とは、道徳的および認識的障害 (kleśa-jñeya-āvaraṇa) としての潜在的な余力の根源である識 (vijñāna) に対していう。一点に〔心を集中する〕止によって身心が適応性 (las su ruñ ba, karmaṇyatā) をえて、そのために、身心の非適応性 (akarmaṇyatā) の因である道徳的および認識的障害としての潜在的な余力を断つことが「溶かし出す」ということである。信解をおこす実践の段階 (adhimukticyā-bhūmi) 以後でも、粗悪の根源である潜在的な余力を溶かし出しうるが、一瞬ごとに溶かし出すことはできず、最初の段階 (prathama-bhūmi) にいたってはじめて、「一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出す」。これが讚嘆の〔第〕一種である。

(2) 「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」ということについて。これは物質的な (rūpin) 法、あれは非物質的な (arūpin) 法、これは有為の法、あれは無為の法と種々に認識しないことが「様々な概念を除去した」法である。

46) チベット訳原文は 'rjes su bsñags pa'。MSA 本文のチベット訳には、'phan yon' とあって異なるが、共に 'anuśaṃsa' を原語としたことは明らか。後者の訳語が一般的であるが、訳者によるこの程度の差異は当然覚悟しなければならない。

47) おそらくは MSA, XIV. 19-22 の散文中のことをさすのであろう。この点については、すでに、宇井博士 (『撰大乘論研究』 p. 624), Lamotte (La Somme du Grand Véhicule d'Asaṅga, Tome II, p. 205, および、同 Notes et Références, p. 40) によって指摘され、さらに野沢静証教授 (『大乘仏教瑜伽行の研究』, 註⑧) の詳しい報告がある。

そのように、相 (nimitta) を様々に認識することを滅して、あらゆる相の妨げを離れた止の無相としての安樂を自ら知って (*rañ gis rig cin*), そこで一点に心を注ぐこと (*rtse gcig tu h̄jog pa*) が「法の園における喜びを得る」ということである。「喜びを得る」というのは、不動の心を得るという意味である。そこで、最初の段階以後に、相を多様に認識することを離れ、無相に住する止の道を集中的に得るので、「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」というのである。これが第二の特徴である。

(3) 「分割できぬ姿をしいかなるところでも量りきれぬ法の輝きをよく知る」ということについて。これは物質的なもの、あれは非物質的なもの、これが物質 (*rūpa*), あれが音声 (*śabda*) であるというように区別せずに、あらゆる法を唯一の味をもった特質のもの (*eka-rasa-lakṣaṇa*) として知ることが、「分割できぬ姿をしいかなるところでも量りきれぬ法の輝きをよく知る」ということである。また、ある法を知って他は知らないというのではなく、十方、三世のあらゆる法を等しく知るので、「分割できぬ姿をしいかなるところでも量りきれぬ法の輝きをよく知る」というのである。これが第三の特徴である⁴⁸⁾。

IV

iv—0) SNS⁴⁹⁾

『世尊よ、菩薩はどのような場合に⁵⁰⁾、総合的な法を対象とする (*h̄dres paḥi chos la dmigs pa, saṃbhinna-dharma-ālabana*)⁵¹⁾ 止と観を獲得するのでしょうか。』

『マイトレーヤ (Maitreya) よ、彼は五種の方法によって [それを] 獲得する

48) これ以下に、*'rnam par brtags pa ma yin pa rnam par dag paḥi phyogs kyi mtshan ma dag la spyod par h̄gyur l'* とあって、(4) の説明に移ったまま途中で文章が切れる。欠漏を思わせるが、それは原本の段階でそうだったのか、あるいは翻訳の段階でそうだったのかは不明。いずれにせよ、Sthiramati 註がこの不完全な形で終止してしまうのは残念である。

49) チベット訳原文は、拙論 A (pp. 160-161) に掲載したから参照のこと。

50) *'ji tsam gyis na'*。この語については、É. Lamotte, *Samdhinirmocana Sūtra: L'explication des Mystères*, p. 188, note, 2 参照。

51) Lamotte の還元は *'mīśra-dharma-ālabaka'*。ここで *'h̄dres pa'* に対応するサンسكريットを *'saṃbhinna'* と想定するのは、MSA XI-10 およびその註で説かれる *'saṃbhinna-ālabana'* による。これは *'vibhinna-ālabana'* と対比的に述べられるもので、この説相は本経 SNS の場合と全く同じである。ちなみに MSA のこの語に対するチベット語も *'h̄dres pa'* である。なお、*'saṃbhinna-ālabana'* *'vibhinna-ālabana'* については、野沢静証『大乘仏教瑜伽行の研究』(pp. 243-245) 参照。

のだと知るべきです。というのも、[菩薩は]、(1) 心を凝らす (*manasikāra*) 時に、⁵² 一瞬ごとに (*skad cig skad cig la, pratikṣaṇam*)⁵³⁾ あらゆる粗悪の根源を溶かし出し (*hjiig par byed pa, drāvayati*)⁵⁴⁾、(2) 様々な概念の除去 (*hdu śes sna tshogs rnam par spañs te, nānātva-saṃjñā-vigata*) と法の園における喜び (*chos kyi kun dgah la dgah ba, dharma-ārāma-rati*) とを得 (*hthob pa, pratilabhate*)⁵⁵⁾、(3) 十方にわたって (*phyogs bcur, daśadiśas*)⁵⁶⁾ 量りきれず分割できぬ姿をした (*rnam pa*

52) 以下の下線部分は、上記三論本文中に附した下線部分と同文であることを示す。

互いに同文であることは、前三論のチベット訳、SNS のチベット訳どうし、あるいは、前三論中、サンスクリットの現存する、AS, MSA の該当文とを比較すれば容易にわかることである。しかし、SNS チベット訳に基づいた Lamotte の還元サンスクリットを介すとそれが困難になる。SNS チベット訳、MS チベット訳、MSA を熟知していたと思われる Lamotte 自身、SNS の校訂仏訳の後に手がけた MS の校訂仏訳中でも両者の一致にはなんら言及していない。以下カッコ内にチベット・サンスクリットを示した箇所は、現存二論のサンスクリットからみて、Lamotte の還元が誤ったと思われる箇所である。Lamotte が SNS の校訂仏訳を最初に試みた業績からみれば、還元サンスクリットの誤りの指摘など取るにたらぬことではあるが、前三論との一致を語る場合には必要な作業かと思われる。前三論と原本上異っていたと認められる箇所もあるが、これはすでに言及した(拙論A, pp. 160)し、以下にも指摘するであろう。

53) Lamotte 還元, 'kṣane kṣane'。彼の還元の方が '*skad cig skad cig la*' に対応するようであるが、'*pratikṣaṇam*' がかく訳されたとしてもおかしくはない。

54) Lamotte 還元, 'vinaśana'。しかも前語との *compand* に解す。なお、この一段に関し、Lamotte は文末に動詞を想定せず、すべて名詞の *compand* によって解している。

55) (2) の文全体についていうと、Lamotte の還元は '*nanā-saṃskārān viṣṛjya dharmānānanda-prīti-lābhaḥ*' となろう。'*saṃskāra*' としたのはチベット訳原文に '*hdu byed*' とあるため、これは漢訳、およびチベット訳 iv—1, 2) SNSBh, SNSV によって訂正されるべきもの(野沢前掲書, p. 246, 註④, 拙論A, 註25)。この語を '*saṃjñā*' と訂正したとしても、彼の還元では '*Ils suppriment les divers notions et jouissent de la félicité de la Loi.*' (cf. Lamotte, 前掲書, p. 216) と読むしかないだろう。また '*ānanda*' では「園」という理解は不可能になる。この(2)に対応するサンスクリットが AS, MSA のものと全く同じと仮定すれば、すべては容易に理解できる。原本がそうであればこそ、本稿註記13)で指摘したような問題も起るのであり、この SNS につき Lamotte のような読みも可能なのである。しかし彼が、この原文を予想しえたならば、MS の校訂仏訳で試みたように、このチベット訳も '*Il obtient la suppression des notions multiples, et, ainsi, le plaisir dans le jardin du Dharma.*' (La Somme du Grand Véhicule d'Asaṅga, Tome II, pp. 205-206) と仏訳したのである。

56) 前三論では '*sarvatas*'。漢訳からみて原文もおそらく '*daśadiśas*' であつたろう。拙論A (p. 160) 参照。ただし意味上に大差があるのではない。i—0) MS に対する

yoñs su ma chaḍ pa, aparicchinna-ākāra)⁵⁷⁾ 法の輝き (chos snañ ba, dharma-avabhāsa)⁵⁸⁾ をよく知り (yañ dag par ses pa, samjānāti, samjānīte)⁵⁹⁾, (4) 義務の完成をそなえた (dgos pa yoñs su grub pa dañ ldan pa, kārya-pariniṣpatti-saṃprayukta)⁶⁰⁾ 清浄な方面に属する (rnam par dag pañi cha dañ hthun pa, viśuddha-bhāgiya)⁶¹⁾ 無分別の相 (mtshan ma rnam par ma brtags pa rnam, avikalpitāni nimittāni)⁶²⁾ を体現し (de la kun hbyuñ ba, asya samudācaranti)⁶³⁾, (5) 法身を獲得し (hthob pa)⁶⁴⁾ 充滿し (yoñs su rdsogs pa, paripūri)⁶⁵⁾ 完成するために、より一層最上の (goñ ma bas ches goñ ma, uttarād uttarataram)⁶⁶⁾, より一層卓越した (bzañ po bas ches bzañ po)⁶⁷⁾ 因を体現する (yañ dag par yoñs su hḍsin par byed pa, saṃparigrahaṃ karoti)⁶⁸⁾ か

i—1, 2) Vasubandhu 註, Asvabhāva 註の (3) を参照せよ。

57) Lamotte は 'ākāra' を想定しない。従って仏訳中にその語感が表わされていない。

'ākāra' を補い bahuvrihi として解すべし。なお本稿註記 14) 参照。

58) Lamotte 還元, 'dharma-āloka'。

59) Lamotte 還元, 'parijñāna'。

60) 前三論には認められない句。漢訳よりみても原本にこの句はあったであろう。

Lamotte は 'anuṣṭhāna-saṃprayukta' と還元するが適切ではない。ここでは論証を略すが, 'dgos pa yoñs su grub pa' は内容的に Śrāvaka-bhūmi に説かれる 'kārya-pariniṣpatti' と原語を一にするであろう (A. Wayman, Analysis of the Śrāvaka-bhūmi Manuscript, p. 86 参照)。チベット語 'dañ ldan pa' に対応するサンスクリットは幾通りも考えられるが, この経の 'dgos pa yoñs su grub pa dañ ldan pa' と原語を一にしていたと思われる句が i—0) MS の Vasubandhu 註である i—1) MSBh の (4) の説明中に認められる。それには 'dgos pa yoñs su grub pa dañ rab tu ldan pa' とあるから, Lamotte のように 'saṃprayukta' を想定するのが最も適切であろう。

61) Lamotte 還元, 'vimokṣa-bhāgiya'。

62) Lamotte 還元, 'nirvikalpaka-nimitta'。

63) Lamotte 還元, 'samudācāra'。

64) 前三論には認められない語。漢訳によっては, この語の確認はさほど明確ではないが, 本経に対する註 iv—1, 2) SNSBh, SNSV によれば, この語は必ずなければならぬものであり, 少なくともチベット訳の基づいた原本にはこの語が認められたであろう。

65) Lamotte 還元, 'paripūraṇa'。

66) Lamotte 還元, 'uttareṣv uttama'。

67) 前三論には認められない句。ただし, AS の玄奘訳のみには「転上転勝」とあって, これに相当する句があったようでもある。この経の二つの漢訳には, これに相当する句があるから, その原典性を主張できる。Lamotte は 'bhadreṣu bhadratama' と還元, 'bzañ po' に対応するサンスクリットとは多いから, 'bhadrā' が正しいかどうか決め手はないが, もしそうだとすれば, 'bhadrād bhadrataram' であろう。

らである。』

iv⁶⁹—1) SNSBh

「世尊よ、菩薩はどのような場合に」などというのは、その獲得の因が問われたのである。「マイトレーヤよ、彼は五種の方法によって〔それを〕獲得するのだと知るべきです」などというのが獲得の因を示す。

(1) 「心を凝らす時に、一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出す」ということについて。「粗悪 (dauṣṭhulya)」とは二種である。貪りなど (rāga-ādi) の煩惱 (kleśa) としての粗悪と、見を相とする (*lta baḥi rnam pa, drṣṭy-ākāra*) 煩惱としての粗悪とである。その「根源 (āśraya)」とはアーラヤ識 (ālaya-vijñāna) である。総合的な法を対象とする止と観は、その二つの粗悪を対治するもの (prati-pakṣa) であるから、その「根源を溶かし出す」のである。

(2) 「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」というのは、粗悪な障害 (dauṣṭhulya-āvaraṇa) を離れ、そのために身心が平静 (praśrabdhi) になって、様々な概念を除去した法の園における喜びを得ることである。

(3) 「十方にわたって量りきれず分割できぬ姿をした法の輝きをよく知る」というのは、量りつくせない (*dpag tu med pa, aprameya*) 法を非常によく感得する (*śin tu legs par reg pa*) からである。

(4) 「義務の完成をそなえた清浄な方面に属する無分別の相を体現する」というのは、人 (pudgala) と法 (dharma) とを相 (ākāra) とする見 (drṣṭi) が清浄だからである。全智たること (*rnam pa thams cad mkhyen pa űid, sarva-ākāra-jñatā*) は、自己と他人の利益を円満させる (*phum sum tshogs par byed pa, saṃpatti*) 因であるから、義務の完成〔をそなえたもの〕なのである。その方面 (bhāga) が証得 (*rtogs pa, adhigama*) であり、それに属する (tad-bhāgiya) 無分別の相が自然に (*ran gi nan gis, svarasena*) 現われるのである。

(5) 「法身を獲得し充満し完成するために、より一層最上な、より一層卓越した因を体得する」ということについて。最初の段階で (prathamāyām bhūmau) 法

68) Lamotte 還元, 'samyak-parigrahaṇa'.

69) 以下に示す, iv—1, 2) SNSBh, SNSV の和訳は野沢静証『大乘仏教瑜伽行の研究』(pp. 235-236, pp. 241-243) に収められているから、ここに訳し直す必要はないが、五種の修習に関する諸文献を和訳によって提示するという本稿の目的ため、筆者なりの訳語で統一したものを示すこととした。それで以下の註記は紙数の関係もあって最少限に止める。

身を証得する。第三の段階で (*ṛṭiyāyām bhūmau*) [それを] 獲得する。第十の段階で (*daśamyām bhūmau*) [それを] 充満する。如来の段階では (*tathāgata-bhūmau*) [それを] 完成する、というのも [そこにおいて] 究極にいたる (*mthar thug par gyur pa, niṣṭhāgata*) からである。「因」というのは、[十の] 段階 (*bhūmi*) とパーラミター (*pāramitā*) の修習によって出離すること (*nes par ḥbyuñ ba, niḥsaraṇa*) である。「より一層最上な、より一層卓越した」というのは、証得から獲得、獲得から充満、充満から完成 [というように] より一層最上なものへ、より一層卓越したものへ [と進展しゆくこと] である。

iv—2)

それ（総合的な法を対象とする止観のこと）に関して、獲得の因を説くために、「世尊よ、菩薩はどのような場合に」などといって問がなされる。「マイトレーヤよ、彼は五種の方法によって [それを] 獲得するのだと知るべきです」などというのは、まさにそれら五種の方法を獲得したときに、それ（止観）をも [同時に] 獲得すると言いあらわされていることを示すのである。

(1) 「心を凝らす時に、一瞬ごとにあらゆる粗悪の根源を溶かし出す」ということについて。「粗悪」とは二種である。食りなどの煩惱で修習によって断ち切られるべき (*bhāvanā-heya*) 粗悪と、見を相とする煩惱で見によって断ち切られるべき (*darśana-heya*) 粗悪とである。その「根源」とはアーラヤ識である。総合的な法を対象とする止と観は、それら粗悪を対治するものであるから、それに「心を凝らす時に、一瞬ごとに」それら「粗悪の根源である」アーラヤ識を「溶かし出す」のである。

(2) 「様々な概念の除去と法の園における喜びとを得る」というのは、粗悪な障害を離れたために、身心の平静さ (*praśrabdhi*) である止の獲得による「様々な概念の除去」と心を一点に集中した (*sems rtse gcig pa űid, cittasya ekāgratā*) 「法の園における喜びとを得る」ことである。

(3) 「十方にわたって量りきれず分割できぬ姿をした法の輝きをよく知る」というのは、身心の平静さである止を獲得したために、心の性質 (*svabhāva*) には [対立的] 二種のあり方は存在しないこと (*gñis med paḥi don, advaya-ārtha*) を自から知る (*rañ rig pa*) 観の智 (*vipaśyanā-jñāna*) が生ずることである。

(4) 「義務の完成をそなえた清浄な方面に属する無分別の相を体得する」ということについて。「義務の完成をそなえた清浄」とは、全智たること (*sarva-ākārajñatā*)。なぜなら、[それは] 自己と他人の利益を円満するなすべき務め (*bya ba,*

kṛtya) の完成をそなえ、人 (pudgala) と法 (dharma) を相 (ākāra) とする清浄な見によって特質づけられている (*rab tu phye ba*, prabhāvita) からである。方面 (bhāga) が証得であり、それに属する (tad-bhāgiya) 相とは、それを獲得する因のことである。〔止と観が〕相合した道 (*zuñ du ḥbrel paḥi lam*, yuganddha-mārga-) の対象である実事を窮めつくすこと (*dños poḥi mthah*, vastu-paryantatā) および義務の完成 (*dgos pa yoñs su grub pa*, kārya-pariniṣpatti) とは、無分別のもので影像 (pratibimba) を超え⁷⁰⁾ はからいのない段階 (*lhun gyis grub paḥi sa*, anābhoga-bhūmi) に包括されるものであって、自然に (svarasena) 現われるものである。

(5) 「法身を獲得し充満し完成するために、より一層最上な、より一層卓越した因を体得する」ということについて。「法身 (dharma-kāya)」というのは、証りそのものである法身 (*rtogs paḥi chos kyi sku*, adhigama-dharma-kāya) と教えとしての法の集り (*bśad paḥi chos kyi tshogs*, deśanā-dharma-kāya) とである。その「獲得」は第三の段階に属する。なぜなら、最初の段階においてあらゆる法の真如 (tathatā) を証得し、第二の〔段階〕における浄められた因 (*yoñs su sbyaṅs pa byas pa*, kṛta-parikarma-hetu) によって、第三の段階において、退りぞくことのないサマーディ (*mi ḥams paḥi tiñ ne ḥdsin*, acyuta-samādhi) を獲得するから、また、聞に関するダーラニー (dhāraṇī) を獲得するから、証りそのものである法身と教えとしての法の集りを獲得するのである。「充満」は第十の段階に属する。なぜなら、全智たるものとして灌頂される (*dbañ bskur ba*, abhiṣikta) からであり、法の雲 (*chos kyi sprin*, dharma-megha) が充満するからである。「完成」は如来の段階に属する。なぜなら、〔それは〕究極的な結果 (niṣṭhā-phala) だからである。「因」というのは、〔十の〕段階 (bhūmi) とパーラミター (pāramitā) の修習としての出離の道 (niḥsaraṇa-mārga) のことである。「より一層最上な、より一層卓越した」というのは、獲得の因から充満の因、充満の因から完成の因〔というように〕より一層最上なものへ、より一層卓越したものへ〔と進展しゆくこと〕である。たとえば、『十地経 (Daśabhūmikasūtra)』に黄金の譬えが説かれているように。その五種の方法と同時に獲得があるというのは確定説 (*ñes pa*, niyata) ではない。

70) vastu-paryantatā および kārya-pariniṣpatti とは、SNS 第八章の始めに説かれる四種の対象に関する実事 (catvāry ālambana-vastūni) の中最後の二種をいう。原語については A. Wayman, 前掲書, p. 86 参照。「pratibimba を超えた」とは、四種のうちの最初の二つ, savikalpa-pratibimba, nirvikalpa-pratibimba を越えたこと。